# 平成２２年度病害虫発生予察特殊報第３号

平成２２年１０月１９日
愛　　知　　県

１　病害虫名：**イチジクヒトリモドキ**
*Asota ficus* (Fabricius)

２　発生作物：**イチジク**

３　発生地域：**尾張地域**

４　発生確認の経過

平成22年９月、尾張地域の露地イチジクにおいて、葉を食害する未知の鱗翅目幼虫が認められた。この幼虫を愛知県農業総合試験場で飼育、羽化させ同定したところ、イチジクヒトリモドキと確認された。その後の調査で尾張地域の４市１町のイチジクほ場で発生を確認している。

本種はヤガ科、ヒトリモドキガ亜科に属する南方系の蛾で、沖縄県では土着とされている。国内では昭和37年に静岡県で、以降は九州各県で散発的な成虫の採集記録があるが、イチジクへの加害は平成11年に愛媛県で初確認された後、西日本を中心に計15府県で発生が報告されており、近県では平成21年に滋賀県で発生が確認されている。

５　形態、生態及び被害

成虫は，前翅の地色が褐色で、基部には橙黄色、黒色、白色の特徴的な斑紋を有する。触角は雄のみ櫛歯状である（図１）。卵は淡黄色で直径約0.8mm のまんじゅう型をしており、葉裏に通常30～60 個、時に150個以上の卵塊として産み付けられる（図２）。若齢～中齢幼虫は、胴部背面が全体に白っぽく、頭部は黒色、体の側面は橙色である。この時期の幼虫は集合性が強く主に葉裏に群生し、表皮のみ残して食害する（図３）。終齢幼虫は体長約40mm で、頭部は脱皮直後は橙色で、その後硬化するとつやのある黒色となる。胴部背面は灰色がかった黒色で、腹面は橙黄色を呈する。刺毛基部は橙黄色で、刺毛基部からは白く長い刺毛が１本ずつ生える（図４）。中齢～終齢になると太い葉脈を残し葉のほとんどを食いつくす（図５）。また、葉が少なくなると果皮も食害する。幼虫は老熟すると樹を降り、土中の浅いところで土繭を作って蛹化する（図６）。

本種は蛹で越冬し、年間４世代を経過すると推定されている。本種が発生したほ場の農家からの聞き取りで、昨年も同様の被害が発生したとのことから、本県において越冬できる可能性が高いと思われる。蛹から羽化した成虫は、昼間は葉裏に生息し、夜間活動する。

６　防除対策

卵塊が産み付けられた葉や、若齢幼虫が集団加害している葉は取り除いて処分する。また、発生初期にアディオン乳剤、モスピラン水溶剤等で防除する。

７　連絡先

農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除グループ
電話　０５６１－６２－００８５　内線４７１

図１　イチジクヒトリモドキ雄成虫

図２　ふ化直前の卵塊（１７３卵あり）

図３　集団で加害する若齢幼虫

図４　脱皮直後の終齢幼虫（左）と頭部が硬化した終齢幼虫（右）

図５　葉脈のみ残し食べ尽くされたイチジク葉

図６　土中で繭を作り蛹化

参考資料

（１）　井上　寛ら編　日本産蛾類大図鑑(1982)、講談社
（２）　イチジクヒトリモドキ既発生府県病害虫発生予察特殊報